

(電子メール施行)
農 技 第 1 6 7 3 号
平成 2 9 年 3 月 1 5 日

各関係機関長 様

兵庫県病害虫防除所長

平成 28 年度病害虫発生予察注意報 第 2 号を下記のとおり発表します。

中生・晩生品種のタマネギ圃場で、べと病の越年罹病株を確認しています。今後の二次感染を防止するため、圃場での発生状況を観察し、「越年罹病株の抜き取り」と「薬剤防除」を徹底するようご指導願います。

平成 2 8 年度 病害虫発生予察注意報 第 2 号

タマネギべと病の防除対策について

- 1 対象作物 タマネギ(中生・晩生品種)
- 2 病害虫名 べと病
- 3 発生地域 淡路地域
- 4 発生程度 多い
- 5 発生状況・予想について

- (1) 淡路地域でタマネギの中生・晩生品種においてべと病の越年罹病株(写真参照)の発生が確認されている。
- (2) 3月6日に中生・晩生品種の現地調査を実施したところ、発病圃場率 1.9%、発病株率 0.005%であった(表参照)。(多発した昨年同時期:発病圃場率 9.1%、発病株率 0.02%)。現在のところ発生は限定的であるが、昨年産タマネギにおいてべと病が多発したため、圃場内の菌密度は高いものと推測される。
- (3) 同日に行った、極早生・早生品種の調査においてもべと病の発生が確認されている(発病圃場率 6.8%、発病株率 0.08%)。生産地では、極早生・早生品種と中生・晩生品種が隣接している場合が多く、分生胞子の飛散により、発病が広がることが懸念される。
- (4) 関係機関による調査においても、中晩生品種で発病が確認されている。
- (5) 圃場内に発病が認められた場合、今後、気温の上昇及び降水量の増加に伴い、胞子の飛散による二次感染(写真参照)が拡大する可能性が高くなる。

6 本病の特徴について

本病は卵菌類による病害であり、前年秋～初冬の苗床や圃場で土中の卵胞子が、降雨等により苗にはね上がり感染し、本田で越年罹病株として発病する。この越年罹病株上に形成された分生胞子が風雨で飛散し、二次感染が起こる。発病は気温 15℃前後で高湿度状態(曇雨天)が、1～2日続く場合に助長される。好適条件において病勢の進展はきわめて速い。

7 防除対策について

- (1) 圃場で発生状況を十分観察し、栽培暦やタマネギベと病対策マニュアル(技術者版)を活用して、越年罹病株の完全な抜き取りと薬剤防除を徹底すること。
- (2) 越年罹病株の抜き取りにあたって、その病徴は圃場内で徐々に発現してくるため、茎葉が繁茂するまで定期的に(1週間に1度程度)よく観察すること。また、孢子飛散を防ぐため、抜き取った株は直ちにポリ袋などに入れ、必ず圃場外へ持ち出した上で、残さ(抜き取った株)の重量に対して1%の割合で石灰窒素を混ぜ、密封して確実に腐らしてから処分する。
- (3) 薬剤防除は、発病の有無にかかわらず、防除暦に従って必ず行う。散布は降雨前に薬剤が乾くように余裕をもって行うことが望ましい。なお、薬剤散布にあたっては、タマネギの生育に応じた水量とし、散布ムラの無いように丁寧に行うこと。
- (4) 極早生・早生品種及びネギ圃場で発生したべと病が、周辺の中生・晩生品種の感染源になるため、地域全体で防除対策に取り組むこと。特に、極早生・早生品種においても、収穫前まで確実に防除を徹底すること。

調査地域	調査圃場数	発病圃場数	発病圃場率	発病株率
南あわじ市	42	0	0.0	0.00
洲本市	11	1	9.1	0.04
平均/計	53	1	1.9	0.005

* 1圃場400株調査とした

* 昨年同期: 発病圃場率 9.1%、発病株率 0.02%



写真 タマネギベと病発病株 (左: 越年罹病株、右: 二次感染株)

* この情報は、兵庫県立農林水産技術総合センターホームページに掲載しています。

(<http://hyogo-nourinsuisangc.jp/>)

問い合わせ先 兵庫県病害虫防除所 0790-47-1222